

歴史を歩く⑱

町文化財紹介コーナー

「飯福寺」



飯福寺

飯隈下集落地内に存在する「飯福寺」は、正式には飯隈山飯福寺照信院（蓮光院）と呼び、また「飯隈山熊野神社」とも呼ばれている。

飯福寺において、門前の仁王像や、境内の如意輪観音像と正観音像といった仏像が存在する一方で、鳥居を構えている光景は、長い間神仏を重ね合わせた日本人の宗教観とともに歩んでいた歴史を物語っている。

飯福寺は、「修験道」の寺院として長い歴史を紡いできた。「修験道」とは、山を神として敬う山岳信仰や神道、仏教、道教、陰陽道が習合した宗教であり、奈良時代初頭に役行者（役小角）という人物によつ

て確立されたものである。修験道の実践者を「修験者」と呼ぶ。いわゆる「山伏」である。

飯福寺の歴史は、今からちょうど1,300年前の708年に始まる。役行者の弟子の一人である義覚が、新熊野三社権現を勧請し、阿弥陀如来・薬師如来・千手観音の三像を安置し、創建した。これが飯福寺を、「飯隈山熊野神社」とも呼ぶ由縁である。

飯福寺が創建されてから35年後の743年、聖武天皇は飯福寺を祈願所とし、神領千石を支給した。境内周りが約19キロメートルとも言われていることから、いかに広大な領地を所有していたかが分かる。さらにこの時、熊野三社の別当寺となった。

別当寺とは、神社に付属して置かれた寺を指す。つまり、仏教を深く信仰していた聖武天皇によって、正式に仏教寺院という位置づけがなされたのである。

修験道は、真言宗系の当山派と天台宗系の本山派と大きく二つの流派に分類される。飯福寺は本山派に属し、本山修験宗総本山である京都天台宗聖護院の末寺であった。江戸時代には、本山派における地方修験の掌握の要をなしていたと言われている。

修験者は、僧侶とは言っても兵学を修め、武装をすることもあった。戦国時代となると、各地や中央の事情に精通していた修験者たちは、時として諜報活動も行っていたとも言われている。このことから、島津家が飯福寺を厚く庇護したのは、単純に飯福寺が武運を祈る場所であっただけではなく、一方で政治的な利用価値があったからとも考えられなくも無い。

1359年に島津氏久によって、志布志市有明町蓬原城が攻略され、城主救仁頼頼世は自殺し、弟の朝元は出家して、飯福寺の第36代別当に就任する。以後、救仁郷氏によって、飯福寺の別当が世襲されることとなる。明治元年の廃仏毀釈によって、

1,000年以上も繁栄した飯福寺は跡形も無くその姿を失った。

町指定文化財になっている仁王像は、地域住民によって掘り起こされたものである。破壊されなければ国宝級であったとも伝えられているが、今となっては、その無惨な姿が皮肉にも、明治の破壊行為のすさまじさを伝えている。

何度、飯福寺に赴いても、昔の様子をイメージすることができない。しかしながら、この飯隈の地に『失われた聖域』があったのは紛れもない事実なのだ。

【大崎町埋蔵文化財専門員 内村憲和】



▲江戸時代の飯福寺の様子（三国名勝図会）より